

「知」
の読書術

佐藤優・著

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

はじめに 7

第一部●「危機の時代」に備えよ

第一章 「世界大戦」は終わっていない¹⁷

「長い一九世紀」と「短い二〇世紀」／「短い二〇世紀」の構造
世界大恐慌の衝撃／「危機の二十数年」に何が起きたのか
「危機の四十数年」から浮かび上がる仮説

ウクライナ危機——第一次世界大戦前夜へと回帰する世界
ウクライナ情勢を解く鍵

「ユーラシア地域の火薬庫」と「ヨーロッパの火薬庫」の相似性
啓蒙の闇と向き合うために

第二章 はたして「近代」は存在したのか³⁷

近代という時代区分／「ルネサンス」「宗教改革」は近代か？
宗教改革は近代の出発点か？／ウエストファリア条約の重要性

近代主権国家の原理／近代合理主義が生み出す非合理な力
近代を学ぶ理由／資本主義がもたらす「疎外」

私たちを規定している外部が何であるのかを知る
人間はイデオロギーから自由になれない

第三章 「動乱の時代」の必読書⁶¹

一七八九年から始まるナショナリズムの時代／民族自決の限界
現代に読みがえる帝国主義／レーニン『帝国主義』を読み解く
現代は新・帝国主義の時代
なぜプーチンはクリミア編入に踏み切ったのか
帝国主義時代に国家機能は強化される

第四章 「反知性主義」を超克せよ⁷⁹

現代日本の反知性主義／パワー・エリート化する政権
民主主義と独裁に境界はない／独裁を成功させる五つのルール
世界は王制に向かっている／フランス革命が独裁制へと行き着く論理
『クーデターの技術』に学ぶ権力奪取の方法
革命のバイブル「なにをなすべきか？」／中間団体の重要性

第二部●「知のツール」の活用法

第五章 私が電子書籍を使うわけ¹⁰¹

電子書籍元年はなぜ来ないのか？／タブレットと電子書籍専用端末は別物
電子書籍は「一冊目」を読むのに適している
『資本論』を使ってアベノミクスを読み解く
電子書籍は「流し読み」に向いている

青空文庫に頼らない——キンドルの一番悪い使い方

電子辞書の百科事典を活用する

英語力をつけるには日本の小説の英訳が役に立つ／教養に力ネを惜しまない

第六章 教養としてのインターネット¹¹⁹

情報収集の基本は新聞購読／海外情報をどのように収集するか
海外報道機関の日本語版ウェブサイトの活用

『ロシアの声』によるエジプト政変の論評

メールマガジンは活用できるか？／購読すべきメールマガの選び方
電子書籍を日々の情報収集に活かすには？
教養のベーシックは紙の本でしか身につかない

第七章 「知の英語」を身につけるには¹³⁵

なぜ日本人は英語が苦手なのか

どういう段階を踏んで学習すべきか

電子書籍の洋書で最初に読むべき本／日本の小説を英語で読む効用
文学や哲学の知識が知的ネットワークを広げる
センター試験で英語力を確認する

知識人の英語力を判定するIELTTS／語学学習の定石

第八章 現代に求められる知性とは何か¹⁵³

教養のための二つの武器／ネット講義を活用する

本選びには書評と書店員を徹底活用せよ

本は三回迷つたら買ったほうがいい／教養共同体の重要性

新しいエリートが生まれている／「贈与」を重視する行動パターン
年長世代に対するアンチテーゼ

グローバルな教養の必要性／教養共同体の入り口

あとがき¹⁷⁴

参考文献一覧¹⁷⁸／卷末特別付録¹⁸⁵

はじめに——「未完の一〇世紀」を読み解くために

本書は、優秀な若い読者を念頭において、「教養を身につけるためには、どんな本をどのように読めばよいのか」という読書術を実践的に解説した本です。

ひとくちに教養と言つても、その理解は論者によつてさまざまですが、私が言う教養とは、單なる^{げんがく}街学趣味や懐古趣味のための知識ではありません。私たちが生きているこの時代のあり方を俯瞰^{ふかん}して見る、「視座」「枠組み」を提示してくれるような「知」のことを指しています。

單に最新の国際情勢や経済事情、あるいは成功法などを紹介しているだけの本（ここでは昨今の新書やビジネス書を主に念頭においている）では、教養を身につけることはできません。なぜならば、そこに書かれているのは單なる「情報」であつて、それらをいくら集積したところで「時代を読む知識」にはつながらないからです。「情報」と「教養」は似て非なるものだということを、まずはしっかりと理解しておいてください。

本書で取り上げる教養本のなかには、数十年、場合によつては一〇〇年以上も前に書かれたものが少なくありません。そうした古い本には、当然、今の世界情勢を知るための「情報」が含まれているはずがありません。しかし、本当に深い教養と鋭い洞察に裏打ちされているような優れた本は、決して古びることはないのです。なぜならば、そうした本で語られている「思想」や「考え方」といった知のフレームワークは、いくら時代が変わつてもいつも簡単には

色あせることがないからです。

と言つても、それだけを選択基準にしてしまうと、古今東西の無数の哲学書、宗教書、さらには小説（小説は事実そのものではないが、そこから思想や哲学を学ぶことが可能である）が入ることになり、收拾がつかなくなつてしまつ。そこで本書では、私たちが生きているこの「未完の二〇世紀」を理解するための読書」という限定をつけて、紹介していきたいと思います。

なぜ現代を「未完の二〇世紀」と呼ぶのか——それは現代が今なお、二〇世紀の課題を解決できず、二一世紀まで持ち越してしまつてゐるからです。

第一次世界大戦が起きてから一〇〇年目の今年、ウクライナを巡つてロシアとアメリカ・EU（欧洲連合）が対立するという事態が発生しました。これは、我々が「未完の二〇世紀」からいまだに抜け出せていないことの、何よりの証左と言えます。

一九一四年六月二八日に、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の甥で、皇位継承者であつたフランツ・フェルディナント大公が、サラエヴォにおいて夫人と共に暗殺されました。このサラエヴォ事件をきっかけに、オーストリア＝ハンガリー政府はセルビアに最後通牒^{つうちょう}を発し、それがさらにロシアの総動員令の発令、ドイツのロシア・フランスへの宣戦布告、イギリスのドイツに対する宣戦布告……といわばドミノ倒しのように戦争が拡大して、ヨーロッパ史上最大の戦争（当時は欧洲大戦と言つた）が勃発^{ほっぱつ}しました。この戦争はドイツやオーストリア＝ハンガリーなど同盟国側の敗北という形で、いつたんは終わりまし

た。しかし、この戦争がそのまま次の戦争、すなわち第二次世界大戦の火種となつたことは、今さら説明するまでもありません。

そこで歴史学者の泰斗エリック・ホブズボームは、「二〇世紀に起こつた世界大戦は、第一次世界大戦と第二次世界大戦の二つに区別するのではなく、途中に休止期を挟んだひと続きの戦争——言うなればこれは『三一年戦争』だつた」という見方を採ります（第一章で詳述）。これは慧眼けいがんですが、私はさらに踏み込んで、ホブズボームの言う「三一年戦争」は、いまだ終わつたとは言えないと考えます。つまり、一九一四年に歐州で始まつた戦争の「火種」は、一〇〇年を経た現在もいまだ消えず、その熾火おきびがくすぶつっているのです。

*

さらにマクロな視点に立つならば、私たちは今なお、一六四八年のウエストファリア条約で形成された、近代システムの延長を生きていると言ふこともできるでしょう。

一七世紀の「三十年戦争」が「終結」し、長い中世が終わつたのは、ウエストファリア条約によつて「主権国家によつて構成されるヨーロッパ」という世界秩序がつくられたからでした。戦争が終わるということは、その戦争をもたらした真の要因が解消されたことを指します。三十年戦争の場合、その要因とは「宗教」でした。ウエストファリア条約はカトリックとプロテスタンントとの長年にわたる対立に終止符を打つたという点で、まさに時代の結節点となつたわけです。

その観点から見たとき、はたして二〇世紀の世界大戦は終結したのでしょうか——結論として、それは終わっていないというのが私の見立てです。

なぜなら、二〇世紀の世界大戦をもたらした真の原因が、いまだ解消されていないからです。一九一四年のオーストリア皇太子暗殺事件をもたらした直接の原因は、ナショナリズム（民族主義）という思想です。ウエストファリア条約によつて宗教対立は解消しましたが、その一方で新しい火種がつくり出されました。それが「国民国家」という思想であり、「民族自決」というドグマです。オーストリア＝ハンガリー＝重帝国の皇太子フランツ・フェルディナントは、なぜ暗殺されたのか。それはボスニア・ヘルツェゴビナの民族自決を目指す過激なナショナリズム集団が存在したからです。つまり歐州大戦とはナショナリズムがもたらした大戦争だったわけです。

と同時に、もう一つ、歐州大戦が生まれた原因としては、これまたウエストファリア条約によつて生まれた主権国家が、国内においては「資本主義」をテイクオフさせ、外に向かつては「帝国主義」を発動させたことが指摘できます。つまり二度にわたる（あるいは三年にわたつて続いた）世界大戦とは、「帝国主義戦争」であつたという見方もできるのです。

この二つの要因は、一九四五年に日本とドイツが連合国に降伏したことによつて、解消されたと言えるでしようか——もちろん、答えはノーです。

たしかに日独両国の降伏によつて戦争状態は終息し、その後は米ソによる東西冷戦、そして

ソ連崩壊後はアメリカ主導のグローバリゼーションの時代へと歴史は移行したかのように思われました。しかし二一世紀の今日、ナショナリズムや帝国主義が再び世界を覆いつつあります。その様子を見て、前世紀の遺物が墓場からよみがえったかのように感じる人もいるかもしれませんが、その認識は間違っています。ナショナリズムも帝国主義も決して終止符を打たれたわけではなかつたのです。世界大戦はいまなお継続しているし、二〇世紀はいまだ続いていると言つても過言ではありません。

このように世界や歴史を捉え直したとき、我々に与えられた課題は自明となります。それはつまり、この「長い二〇世紀」を「人類の輝かしき発展と進歩の時代」と考えるのはやめにして、再び原点に戻ること——つまり一九世紀、いや、ウエストファリア条約の時代（第二章四三頁参照）にまで戻つて、人類の抱えていた諸問題の実態を正確に把握しなければならないということです。

現在起きているさまざまの事象の、根底にある問題は何なのか、その本質は何なのか——単に新しい情報を追いかけているだけでは、それらをつかむことはできません。そこで必要になってくるのが「教養の力」であり、それを支える「真の読書」とでも言うべきものなのです。

*

ではいったい、私たちは今どのような本を読むべきなのでしょうか。

私たちは現在、二種類の本にアクセスできる環境にあります。一つは「紙の本」であり、も

う一つは「電子書籍」です。そして結論から言えば、教養を身につける読書は、あくまで紙の本を中心に据えるべきでしょう。

なぜなら、私は日本における電子書籍の普及期はまだ先だと思っているからです。現在の日本の電子書籍環境は、きわめて貧弱です。欧米に比べると、古典名著のみならず、教科書や学習参考書もほとんど電子化されていない。それもあって電子書籍リーダーは知的ツールというよりも、むしろ漫画を読む道具として愛用されているように感じます。

そこで本書の前半では、ホブズ、ボームやトレルチ、レーニンなど、紙の本でしか読めない古典名著を取り上げながら、現代世界が抱える危機の構造を読み解いていきます。この前半部分を読むだけで、現在の国際情勢や国家・権力の本質を捉える基本的な視座を獲得できるようになっています。

そのうえで、本書の後半では、電子書籍の活用法を考えてみたいと思います。たしかに電子書籍だけでは、教養に必須とされる名著にアクセスできません。しかし、それでもなお、電子書籍には利点があります。

その第一は、反語に聞こえるかもしませんが、「ネット断ち」をするのに電子書籍リーダーほどいものはないということです。ことにキンドル・ペーパーホワイトのような電子インク型のリーダーは表示がモノクロであるし、通信速度も表示速度も遅い。動画など、もちろん見ることもできません。しかし、こういう「欠点」がむしろ、今のようにありとあらゆるところ

ろでネット接続が可能な時代においてはプラスに働きます。それは電子書籍リーダーを使うことで、読書に集中せざるをえない環境をつくることができるからです。

第二に、電子書籍は携帯図書館として使用できるということです。つまり、常に参照したい本や読み返したい本は電子書籍でも手に入れておき、それを自分の「情報源」「記憶庫」として用いるという方法です。

それと、押さえておかなければいけない最新のベストセラーなどは、電子書籍で斜め読みして終わりにする。もし、そのなかで面白いと思ったデータやエピソードがあれば、そこをブックマークしておき、ビジネストークやプレゼンテーションで必要になれば、その都度、それを電子書籍から引っ張りだせばいい。そういう情報はわざわざ自分の頭のなかに蓄えておく必要はないのです。

これが電子書籍の登場以前でしたら、自分が最近読んだ本をすべて持ち歩くわけにもいかないので、抜き書きをつくるか、あるいは記憶しておかなければなりませんでした。しかし今の時代は、そのようなことをする必要がありません。極端な話、ブックマークをする必要もない。なぜなら、全文検索すればすぐに取り出すことができるからです。

そういえば、かつて速読術というのが流行りました。あれは本を「読む」のではなくて、ページ全体をグラフィックメモリに落とし込んでしまうというメソッドで、時間のないビジネスパーソンには重宝がられました。しかし、今はそうした「術」を体得するまでもないのです。

第三に、語学の学習ツールとして電子書籍は非常に有効です。教養人として必要な英語力とは、日常会話ができるような力ではありません。質の高い英文を読みこなす力が、教養英語の必須条件になります。ですから、教養人の英語を身につけたければ、英語の本を数多く読むことから始めなければなりません。そのためのツールとして、辞書を内蔵している電子書籍は利用価値が高いのです。

こうした電子書籍の利点に着目して、本書では基本的な電子書籍の活用法、電子メディアを用いた情報収集術、英語学習法などを解説しました。これらの技法を取り入れれば、書籍から吸収した知識や教養が、より効果的に定着するようになるはずです。

長い戦間期を経て、世界大戦が再燃しかねない今日の危機の時代にあって、何よりも重要なのは広く情報を知ることではなく、「どれだけ教養という井戸を、深く掘つていけるか」ということです。これから時代を背負う若い人々には、ぜひ教養という井戸を深掘りしていくほしい。本書がその役に立てば幸いです。

に危機の時代

第一章 「世界大戦」は終わっていない

「長い一九世紀」と「短い一〇世紀」

イントロダクションでも紹介したイギリスの歴史学者エリック・ホブズボーム（一九一七～二〇二二年）は、フランス革命が始まる一七八九年から、第一次世界大戦が勃発する一九一四年までの時代を「長い一九世紀」とし、一九一四年からソ連が崩壊する一九九一年までを「短い二〇世紀」と呼んでいます。

なぜ、一七八九年から一九一四年までが「長い一九世紀」なのか——それはこの時代が「^{もう}启蒙思想の時代」だからです。启蒙思想とは、理性を用いて知識を増やし、科学技術を発展させれば理想的な世の中が実現するという考え方のことです。

一七世紀後半のヨーロッパでは、近代科学の確立とともに、合理性を重んじる思考や思想が他の学問分野にも浸透していきました。启蒙主義の学者たちは、理性に絶対的な信頼をおき、教会や絶対主義国家を支える権威や思想・制度・習慣を批判し、新たな社会秩序を構想していきます。

しかし、その「理性を尊重すれば、理想的な社会をつくることができる」と考えるヨーロッパの近代精神にとつて、あつてはならない大規模戦争が勃発しました。それが二〇一四年に、勃発からちょうど一〇〇年目を迎えた第一次世界大戦です。

一七八九年のフランス革命以来、政治的には「民主主義」と「自由主義」が、経済的には自

由経済を基盤とする「資本主義」が発展してきました。これからの中は、より豊かな方向へと着実に進歩していく——そう信じられていたのですが、理想の社会は実現されず、啓蒙の思想は第一次世界大戦の「大量殺戮^{さつりく}・大量破壊」へと帰着することとなりました。ホブズボームは、ここに「時代の切れ目」を見いだしたのです。

過去の歴史を検証するうえで、ホブズボームのように時代を「意味の固まり」として捉える見方は非常に重要です。一九世紀、二〇世紀という区分に囚^{とら}われていると、時代の本当の姿を見誤ってしまいます。

ホブズボームは、『市民革命と産業革命——二重革命の時代』(岩波書店)、『資本の時代 一八四八～一八七五』『帝国の時代 一八七五～一九一四』(ともにみすず書房)という三部作で「長い一九世紀」を描いたのち、『20世紀の歴史——極端な時代』で「短い二〇世紀」の展開を綴っています。

この四作は高校生程度の読解力があれば、読

图表

み進めるることは難しくありません。しかも文句なしに面白い。とつつきやすいホブズボームの著作は、近現代史の格好の入門書として推薦したい本です。

この章では、一九九四年に刊行（邦訳版は九六年刊行）された、ホブズボームの『20世紀の歴史』をテキストとして、「現代はどのようないくつかの時代なのか」という問題を考えていきたいと思います。

「短い二〇世紀」の構造

まずホブズボームは、この本のなかで「短い二〇世紀」を、「破局の時代」「黄金時代」「危機の時代（＝危機の二十数年）」の三期に分けて説明しています。

「破局の時代」は、一九一四年の第一次世界大戦勃発から第二次世界大戦が終わる一九四五年までを指しています。この二つの戦争は、文字どおり地球規模の「世界大戦」であり、かつてない大量殺戮と大量破壊をもたらしました。ただしホブズボームは、第一次世界大戦と第二次世界大戦を二つの戦争と区別せず、二〇世紀に起こった「三一年戦争」として捉えます。この三一年戦争が破壊した「一九世紀の西欧文明」について、ホブズボームは次のように簡潔にまとめています。

この文明は経済においては資本主義的であり、法的、憲法的な構造においては自由主義的で

あり、それに対応する指導的階級の人物像はブルジョワであつた。その文明は科学、知識、教育の発展、物質的、道徳的な進歩を賛美し、科学、芸術、政治、産業に生じた革命の誕生の地であるヨーロッパが世界の中心であると深く確信していた。そのヨーロッパの経済が世界の大部分に浸透し、その兵士たちが世界の大部分を征服し従属させた。その人々は人類の三分の一を占めるまでに増大し（ヨーロッパから出ていく移民とその子孫が大量に、かつますます多く流出していくのまで含めて）、そしてヨーロッパの主要列強が世界政治システムを構成していたのである。（『20世紀の歴史』上巻、一一頁）

こうした「長い一九世紀」を通じて形成された「自由―資本主義」社会を、瀕死の状態に陥れたのが「破局の時代」です。この時代、一九一七年のロシア革命によつてソ連という共産主義国家が生まれ、戦間期にはナチズムも登場しました。ホブズボームは言います。

そして一九世紀の自由―資本主義のもつとも注目すべき成果である単一の普遍的な世界経済の創造が、逆転させられたかのように見えた。戦争と革命を逃れたアメリカでさえもが、崩壊は間近いように見えた。経済はよろめき、他方でファシズムとその衛星的な権威主義的運動と体制が登場し、自由―民主主義のさまざまな制度は一九一七年から一九四二年にかけて、ヨーロッパの周辺、北アメリカとオーストララシア（オーストラリア、ニュージーランドと、その

近海の諸島）の各部分を別とすれば事実上全世界から消滅したのである。（同書上巻、一二二頁）

一九二〇年には選挙によつてつくられた政府を持つ国が三五カ国以上（いくつかのラテン・アメリカの共和国をどのように分類するかによつて国の数は変わる）も存在したのに、一九四四年には地球上の総計六四カ国中およそ一二カ国になるほど、この時代に自由主義は後退してしまつたのです。

世界大恐慌の衝撃

戦間期で忘れてはならないのが、一九二九年に起こつた世界恐慌です。前代未聞の大量失業者を生み出したこの世界恐慌で、資本主義経済は壊滅的な打撃を受けました。そんななか、ナチス・ドイツは「失業をなくすことに成功した、ただ一つの国家」となり、ソ連は新しい五年計画のもと「大規模工業化」を実現しました。ホブズボームは、世界恐慌がなければヒトラーは存在しなかつたし、ソヴィエト体制は資本主義に対するまじめな競争相手には、およそなりえなかつただろうと説明しています。

このように、一九世紀では輝かしい理念だつた民主主義や資本主義は、戦間期を通じて崩壊の危機にさらされていました。ただ皮肉なことに、資本主義国家の危機を救つたのも、実はソ連でした。ソ連の存在がなければ、現代のヨーロッパは「権威主義とファシズムを主旋律に

したものとなつていていたであろう」とホブズボームは言います。「自由—資本主義」と「共産主義」は、水と油の関係です。しかし、第二次世界大戦において、和解しがたい両者が一時的に手を結んだことで、ナチス・ドイツに勝利することができたのです。

ヒトラーを敗北させた共産主義国ソ連は、戦後にアメリカと並んで超大国の一つになりましたが、「ソ連型経済」が資本主義に匹敵するモデルとして評価されたのは、戦間期の大恐慌で優位性を示すことができた点が非常に大きかったと言えます。また戦後、社会主義は資本主義の自己改革を促す役割も担つていきました。

第二次世界大戦後の、アメリカ中心の資本主義陣営と旧ソ連中心の共産主義陣営との間で続いた対立関係——いわゆる「冷戦」下である一九四五年から一九七三年にかけて、資本主義陣営は前例のない経済的繁栄を迎えるました。それが「黄金の時代」です。

先進国が飛躍的な経済成長を遂げた「黄金の時代」は、同時に福祉国家の時代でもありました。国家の大規模な公共事業や手厚い社会福祉のもと、失業率は低下し、多くの労働者が豊かな生活を享受できるようになりました。日本の高度経済成長時代も、この時期にあたります。しかし「黄金の時代」は、長くは続きません。時代に終止符を打つきつかけとなつたのが、一九七三年のオイルショック（石油危機）です。

オイルショックの背景には、イスラエルとアラブ諸国との中東戦争があります。七三年の第四次中東戦争（ヨム・キプール戦争）を契機に、O A P E C（アラブ石油輸出国機構）がイスラエル

支援国に対して原油価格を大幅に引き上げたせいで、先進国の経済に大混乱が生じました。その混乱は一時的なものにとどまらず、この時期から世界的な不況が始まります。先進国の経済成長は翳り^{かげ}を見せ、福祉国家政策も行き詰りました。オイルショックのあつた七三年から九年の共産主義体制の崩壊を経て、九四年に至るまでが「危機の二十数年」——すなわち「世界が方向感覚を失い、不安定と危機に滑り込んでいく」時代です。

「危機の二十数年」に何が起きたのか

具体的に「危機の二十数年」の内実を見ていきましょう。

経済的には、福祉国家の行き詰まりにより「新自由主義」が主導権を握っていきます。新自由主義とは、政府による社会保障や再分配を極力排し、企業や個人の自由競争を推進することで、最大限の成長と効率のいい富の分配を達成するという経済的な立場を指します。

一九八〇年代は、イギリスのマーガレット・サッチャー政権、アメリカのロナルド・レーガン政権、日本の中曾根康弘政権など、新自由主義的な政権が次々と誕生した時代でした。この新自由主義が二〇一四年の現代に至るまで、グローバリゼーションと結びつきながら、巨大な格差を生み出し続けていることは、今さら説明するまでもないでしょう。

この格差の拡大が、労働者階級の分裂——ひいては政治的空白地帯を生み出したのだと、ホブズボームは指摘しています。

経済的な困難の時期には、有権者はどのような政党や体制であれ、ともかく政権についているものを非難する傾向があることはよく知られているが、危機の二十数年の新しさは、政府にたいする反発が必ずしも既存の野党勢力の有利にはならないという点にあつた。主要な敗者は西側の社会民主主義政党ないし労働党であつた。これらの党が支持者を満足させる主要な手段——自國政府による経済的、社会的な行動——がその力を失い、支持者の中心的なブロックである労働者階級が分断されてしまつたからである。新しい超国家的経済においては、国内の賃金は以前よりもはるかに直接的に外国との競争にさらされ、政府が国内の賃金を守る力ははるかに小さかつた。(同書下巻、一九二頁)

つまり新自由主義の浸透とともに、労働者は安定した職に就いている中・上流層と不安定な下層に分裂し、その結果、従来の左翼政党が求心力を失つてしまつたというのです。その政治的空白を埋める政党のなかで、「もつとも大きい成長の可能性を示している新しい政治勢力は、大衆主義的な煽動政治と、指導者個人を高度に前面に押し出す手法と、外国人にたいする敵意とを結合しているような勢力であつた」というホブズボームの指摘は、現在にもそのまま当てはまります。

「危機の四十数年」から浮かび上がる仮説

「危機の二十数年」に対するホブズボームの診断は、決して明るいものではありません。

一九九一年にソ連が崩壊したことで、ソ連型社会主義が無効であることは明らかになりましたが、新自由主義経済もまた「その結果は経済的にははなはだ悪く、社会的、政治的には破滅的なものに終わった」とホブズボームは指摘しています。さらにホブズボームは、グローバル経済が国家と制度を解体していくなか、「知的な無力感」が「絶望的な大衆感情」と結びついて、政治的に強い力となっていることにも危惧の念を抱いています。同書が刊行されてから現在まで、さらに二〇〇〇年の歳月が経過しました。しかしホブズボームの時代診断は、世紀をまたいだ二一世紀においても、ほとんどそのまま適用できるのです。

このような視点から、「短い二〇世紀」とそれに続く現代とを問い直してみると、一つの仮説が浮かび上がります。それは「『短い二〇世紀』は、まだ終わっていないのではないか」という仮説です。一九一四年から始まつた「短い二〇世紀」のなかで、五〇年代、六〇年代の「黄金の時代」という特殊な時代はありましたが、時代の基調は一貫して「危機の時代」だったのではないか——つまり第一次世界大戦をもたらした啓蒙の闇は、現代をもなお覆い続けているのではないか、ということです。

ウクライナ危機——第一次世界大戦前夜へと回帰する世界

折しもこの二〇一四年に、世界は第一次世界大戦前夜を彷彿させる危機に見舞われました。それが、ウクライナを巡るロシアとアメリカ・EUの対立です。

まず、今回のウクライナ危機について、簡単にまとめておきましょう。

二〇一四年二月二三日、ウクライナ議会は所在不明のヴィクトル・ヤヌコビツチ大統領を解任し、翌二三日、オレクサンドル・トゥルチノフ議会議長を大統領代行に指名しました。これをもって、ヤヌコビツチ政権は事实上崩壊したわけです。

ウクライナ情勢が不安定化した直接のきっかけは、二〇一三年一一月二一日、ヤヌコビツチ大統領が、それまで進めていたEUとの経済連携強化の協定交渉を突然中止し、ロシアとの関係を強化する方針を表明したことです。この方針転換に反発する十数万人規模の反政府集会やデモが連日続き、治安部隊との衝突も激化。多数の死者も出たことで、事態は緊迫の度合いを高めていきました。

二〇一四年二月二一日、ヤヌコビツチ大統領は、事態の打開を図るため野党側に譲歩し、大統領選を前倒しで実施することに合意しました。しかし反政府派のデモは収束せず、ついには首都キエフを掌握します。その後、ヤヌコビツチ大統領は行方不明となり、最高議会は大統領不在で解任決議を行い、政権崩壊へと至ったのです。

このウクライナでの「革命」に続き、三月一六日には、ウクライナのクリミア自治共和国で住民投票が行われ、クリミアのロシア編入が支持されました。この結果を受けて三月一八日、ロシアはクリミアの編入を決定します。さらに四月になると、ウクライナ東部で親ロシア派勢力が地方政府の地元政府庁舎を占拠し、分離独立を主張しました。クリミアと同じようにロシアへの編入を問う住民投票実施を求める動きが広がっていました。

それに対しても新政権は治安部隊を投入し、親ロシア派武装勢力の強制排除を続けています。本書を執筆している時点（二〇一四年七月二十四日）でも、危機は深まっています。事態が打開される見通しは立っておりません。さらに二〇一四年七月一七日には、ウクライナ東部でマレーシア航空機が撃墜され、乗客・乗員二九五人が死亡するという痛ましい事件が起きました。親ロシア派武装集団が民間機であると気づかず、地対空ミサイルで撃墜したようです。これで米露関係は東西冷戦終結後、最も冷え込むことになりました。ウクライナの東部・南部で起きている事態は事実上の戦争です。

ウクライナ情勢を解く鍵

ウクライナ危機は連日、新聞やテレビで報道されています。しかし、この問題の本質を理解するには、ウクライナの歴史・文化的背景を知らないくてはなりません。ここで、最も重要な問題に絞って、ウクライナ情勢について解説しておきましょう。

今回の問題の本質を理解する鍵は、ウクライナ人が持つ「複合的アイデンティティ」にあります。ウクライナは「西部」と「東部・南部」「クリミア」それぞれで、民族意識が大きく異なります。

ロシアに編入されたクリミア自治共和国ではロシア語を話す人が圧倒的で、ウクライナ語はほとんど使われていません。また住民投票の結果からも明らかのように、住民の九割以上がロシアへの編入を希望しています。

そして現在、親ロシア派が建物を占拠している東部・南部地域は、クリミアほどではないものの、ロシア語を日常的に話す住民が多数派を占めています。宗教もロシアと同じ「ロシア正教」です。ロシア正教とは、イコン（聖画像）崇拜や厳格な修道制を特徴とする、東ローマ帝国内のキリスト教である「東方正教会」の一派で

图表

す。これら東部・南部地域の民族意識は未分化で、「ウクライナ人」「ロシア人」という自覚が曖昧です。「民族など気にしなくても生活できる」というのが、ロシア語を常用する住民の標準的な意識なのです。

クリミアや東部・南部地域に対し、西部（特にガリツィア地方）のウクライナ人たちは、「我々は断じてロシア人ではなく、ウクライナ人である」という強烈な民族意識を持つています。ガリツィア地方では、イコン崇拜や下級聖職者の妻帯を許可するなど、外見はロシア正教と似ていますが、ローマ教皇（法王）の指揮監督下に入ったユニエイト教会（東方帰一教会、東方典礼カトリック教会とも）の信者が多数派です。

したがって、ウクライナの西部と東部・南部では、ロシアに対する距離感がまったく異なるのです。西部の民族主義者たちが、ロシアからの影響を排除し、EUとの連携強化を目論んでいるのに対し、東部・南部はロシアに強い親近感を示しています。ウクライナからの分離独立にも、肯定的な住民が多数存在しているのです。そして、今回のウクライナ政変を牽引してきたのは、西部の民族主義者たちでした。

そこにロシアが軍事介入するような事態になると、ウクライナ系とロシア系の民族衝突が発生します。今はまだ民族意識が未分化な人々も、いずれどの民族に帰属するかの決断を余儀なくされてしまう可能性がある。この民族衝突はウクライナ人が約三〇〇万人（二〇〇二年国勢調査）住んでいるロシアにも飛び火します。もしロシア国内で、ロシア人とウクライナ人の間に

深刻な民族対立が発生すれば、ロシアのみならず、ユーラシア地域の情勢をも著しく不安定化させてしまうでしょう。

「ユーラシア地域の火薬庫」と「ヨーロッパの火薬庫」の相似性

このような複合的なアイデンティティを抱えるウクライナの危機は、対処を誤れば第三次世界大戦の発火点となる危険性を孕んでいます。今やウクライナは、「ユーラシア地域の火薬庫」と呼ぶべき様相を呈しているのです。そして、このウクライナを巡る対立構図は、否が応でも第一次世界大戦前夜を思い起させます。

第一次世界大戦において「火薬庫」と呼ばれたのは、ヨーロッパのバルカン半島でした。一九世紀末はオスマン帝国の衰退が決定的になる時代であり、ヨーロッパ列強の対立がオスマン帝国を舞台に深まつていく時代でした。

一八七七年の露土戦争において、南下政策をとるロシアにオスマン帝国が敗れた結果、ルーマニア、セルビア、モンテネグロがオスマン帝国から独立しました（ベルリン条約）。この敗戦で、オスマン帝国はバルカン半島の領土の大部を失います。さらに一九〇八年には、オーストリアがボスニア・ヘルツェゴビナを併合しますが、ボスニア・ヘルツェゴビナにはスラブ民族であるセルビア人住民が多く、セルビアはこの併合に反発します。

大まかに言えば、オスマン帝国の衰退後のバルカン半島の危機は、ロシアをリーダーとする

「汎スラブ主義」と、ドイツ・オーストリアを中心とする「汎ゲルマン主義」との民族的な対立と捉えることができるのです。

一九一四年六月二二八日、この火薬庫に一人のセルビア人青年が銃弾を撃ち込みました。この日、ハプスブルク帝国（オーストリア＝ハンガリー二重帝国）の皇太子フランツ・フェルディナント夫妻が、サラエヴォ（当時オーストリア領、現ボスニア・ヘルツェゴビナ）でセルビアの国粹主義の青年によつて暗殺されたのです。

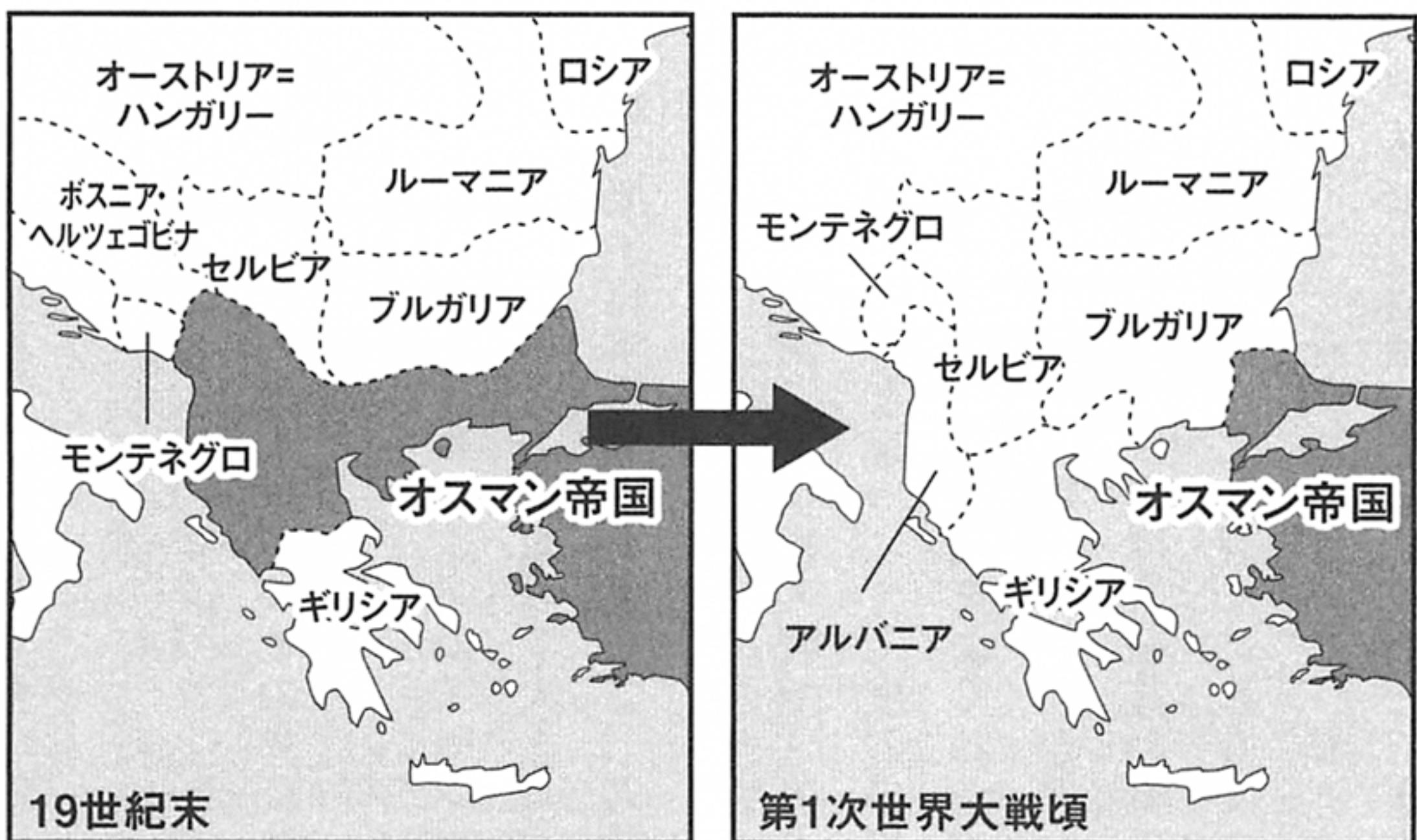
このセルビア人青年は、ボスニア内で反オーストリアを掲げ、南スラブ統一を求める秘密結社「青年ボスニア」の一員だつたと言われています。さらにその背後には、セルビア内で反オーストリアと南スラブ統一を掲げる「黒手組」というテロ組織の存在がありました。

この事件がきっかけとなつてオーストリア側はセルビアに最後通牒を突きつけ、それが受け入れられないとすぐさま宣戦布告しました。

ここからドミノ倒しのよう、戦争は拡大していきます。

セルビア側にロシアがついて、軍隊に総動員令を発令すると、今度はオーストリアの同盟国ドイツがロシアとその同盟国フランスに宣戦布告します。さらにドイツが永世中立国ベルギーに侵入したことを理由に、イギリスがドイツに宣戦布告し、日本も日英同盟を理由に参戦しました。

開戦当初は、誰もが数カ月で戦争は終わると楽観していました。しかし、上記のように「大



1913年5月のロンドン条約で、オスマン帝国はイスタンブル周辺をのぞくバルカン半島のほとんどを割譲した。その後、バルカン半島での勢力変動が列強の対立をさらに深化させたので、この地域は「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれるようになった。(山川出版社『詳説 世界史』をもとに作成)

啓蒙の闇と向き合うために

「ヨーロッパの火薬庫」だったバルカン半島に、民族主義者の凶弾が撃ち込まれたことで、誰もが予想しなかつたような大戦が勃発した——それと同様の危機が、現在ウクライナを包み込んでいます。

ここまで説明すれば「『短い二〇世紀』は、まだ終わっていないのではないか」という仮説の意味も理解していただけるでしょう。

ホブズボームは、第一次世界大戦と第二次世界大戦を「三一年戦争」というひと続きの世界大戦として捉えました。この見方に私も同意しますが、話はそれだけでは終わりません。同時に私たちは、「三一年戦争」の延長線上の時代

戦」へと拡大したことで戦局は泥沼化し、ようやく一九一八年一一月に終結を迎えたのです。

を生きていると言えるのです。だとすれば私たちは、再び啓蒙の闇と向き合わなければなりません。

第一次世界大戦のインパクトから、人間の思考は根本的に変わつてきました。本書では触れませんが、カール・バルトの弁証法神学であるとか、マルティン・ハイデガーの存在論哲学であるとか、クルト・ゲーデルの不完全性定理であるとか、アルバート・aignシュタインの対性理論、ヴエルナー・ハイゼンベルクやエルヴィン・シュレーディンガーの量子力学などが登場して、思考の枠組みが大きく変わりました。ファシズムにしても、近代的なシステムのなかで原子化する個人を束ねて、人間の本来性を取り戻す問題意識からスタートした政治運動だつたのです。

ところが第二次世界大戦で、アメリカが巨大な物量によつて勝利を收めてしまう。アメリカはヨーロッパと違つて、二度の世界大戦を経てもまだ啓蒙の精神が盛んで、非合理な情念が人間を動かすという感覺をよくわかつていませんでした。そのため、啓蒙思想や合理的な思考がもたらす負の帰結に対して洞察が働かず、問題が先送りにされてしましました。アメリカ型の啓蒙精神は、第一次世界大戦後のヨーロッパ知識人が格闘した啓蒙の闇の問題を覆い隠してしまひ、その影響が二一世紀の現在まで続いてしまつてゐるのです。

そして、そのツケが現在、格差問題や貧困、排外主義、領土問題、民族紛争といった形で「四十数年の危機」として浮上してきました。私たちはいま一度、第一次世界大戦後の知識人たち

と同じように、「啓蒙思想や合理的思考がもたらす、負の帰結とは何か」という問題意識を持つて、時代を考察しなければなりません。

そこで必要となつてくるのが、啓蒙思想や合理的思考を生み出した「近代」というものを理解することです。そのための格好のテキストとして、ドイツの神学者エルンスト・トレルチの著書『ルネサンスと宗教改革』（岩波文庫）と、論文「近代精神の本質」（『トレルチ著作集10——近代精神の本質』収録、ヨルダン社）が挙げられます。トレルチは、文化史・宗教社会学の分野で大きな業績を残しましたが、本来の専門はプロテスタント神学です。このトレルチは、日本でも有名な社会学者マックス・ウェーバーのプロテスタンティズム理解に強い影響を与えた人物です。

次章では、トレルチのテキストを読みながら「近代」について考えていきましょう。

「知」の読書術
佐藤優・著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,000 円 (本体) + 税
ISBN978-4-7976-7275-6

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)